

島尾敏雄と『死の棘』

——松島浄の《『死の棘』ノート》について

比 嘉 加津夫

沖繩に島尾敏雄の文学ファンは多い。しかし、また、島尾敏雄に関する文章もかなりの数、書かれている。ところが、そのほとんどは島尾敏雄の小説世界について触れたものではなく、ヤポネシア論など彼のエッセイ群に対して触れているのが特徴だ。

そのようななか、沖繩の文学にも関心をたかめている松島浄さんは、島尾敏雄文学に精通し、しかもそのなかでも小説論をてがけられていることがわたしなど島尾ファンからするとなんともうれしきかぎりなのである。

今回、彼の《『死の棘』ノート》を読む機会があった。このノートで、彼がしめした関心は①『死の棘』はなぜ「離脱」という章からはじめたのか、②「離脱」とはどういうことを意味しているのか、③島尾敏雄は『死の棘』で何を表現しなかったのか——という点におかれていることはたしかだ。

『死の棘』は「家の中」から始まっているもよかった。事実、芸術選奨を受ける契機となった講談社発行の短編集『死の棘』は「家の中」という作品をトップにもってきていた。

このことは謎のひとつである。松島さんも指摘しているように「離脱」の五ヶ月前に書かれた「家の中」と、

問題になっている「離脱」は、いわば地続きの作品であり、ということとは重なりあう部分があるため、「家の中」は長編『死の棘』から除外されたという見方をすればすっきりする。

しかし、そのうえさらに松島さんは『死の棘』の第一章に「離脱」をもってきたのは「主役の転換」と「文体の変化」という作品上の理由があるからだと奥野健男の文章を引き合いに出しながら指摘している。

そして、ここに設問②の「離脱」の意味することの説明を見出している。島尾敏雄は『死の棘』で「家の中」的な世界から離脱したのだということだ。これはこれで、立派な指摘だとも思う。つまり、長編『死の棘』をスタートさせることで、「単独旅行者」、「夢のなかでの日常」的な小説世界から離脱していくことを暗にしめしたということである。

そのことが、③で問うた島尾敏雄が長編『死の棘』に向かっていく意味があったのだということにつながっていく。松島さんはこのノートで吉本隆明、奥野健男の島尾論をテキストにして、自らの考えを傍証し、あるいは自らの考えを再確認しているのだと言えは言える。

しかし、ここで彼自身も問うている「南島の女」としての島尾ミホについて、あるいはなぜ神戸での安定した生活から抜け出て東京での不安定な生活に向かわざるを得なかったのかというモチーフをさらに深めてもらいたいとおもう。わたしは個人的にも松島さんの今後の活躍におおいに期待したいし、願っている。